

戦前「中間層」日本人女性の台湾への移動——「越境」と植民地経験を考える（顔 杏如）

## アジア・太平洋研究センター主催、国際地域文化研究科共催講演会

日 時：2024年1月16日（火）

場 所：南山大学 Q棟5階51, 52会議室

テーマ：戦前「中間層」日本人女性の台湾への移動  
——「越境」と植民地経験を考える

報告者：顔 杏如（国立台湾大学文学院歴史学系副教授、国際日本文化研究センター外国人研究員）



### 講演の概要

1. なぜ「中間層」日本人女性の移動？
2. 高橋鏡子と尾崎孝子について
3. 越境の背後には——外的な政治，社会環境と内的な精神意識
4. 文筆活動／帝国の拡張における役割——高橋鏡子
5. 文筆活動／帝国の拡張における役割——尾崎孝子
6. 社会階層の「越境」
7. ジェンダーの境界と「越境」
8. 彼女たちにとっての台湾とは？

（上記の概要については、当日配布された資料に基づき、タイトルを抽出したものである。それに便宜上、順に数字を振っている。）

本講演会は、国立台湾大学文学院歴史学系副教授として教育・研究活動に従事され

ている顔杏如氏が、国際日本文化研究センター外国人研究員として1年間、日本に滞在されている貴重な機会に本学に来学いただき、顔杏如氏の長年の研究テーマである植民地期台湾への日本からの女性の移動に関する最新の知見について、ご報告いただいたものである。当日は、多彩で豊富な資料も紹介いただきながら、日本語でご報告がなされた。以下、その概要について述べていく。

まず「1. なぜ「中間層」日本人女性の移動？」において、日本帝国の拡張に伴う人の移動と社会文化の変貌について、特に台湾在住日本人に焦点をあてて考察するが、その中でも特に不可視化されやすい「女性」の存在に着目するという本報告の特徴と目的が明確に語られた。その上で「2. 高橋鏡子と尾崎孝子について」では、本報告で具体的に着目する在日日本人女性、高橋鏡子と尾崎孝子に関して、彼女たちの経歴が概観され、さらに「3. 越境の背後には—外的な政治、社会環境と内的な精神意識」では、高橋と尾崎、二人の境遇と台湾に渡る心情が対比的に論じられた。

その上で「4. 文筆活動／帝国の拡張における役割——高橋鏡子」では、高橋鏡子の台湾での活動に焦点があてられ、1924年から1932年まで台湾に滞在した高橋が台北婦人修養会などの活動で得た人脈を活かして、当時の「良妻賢母」の枠組みを超えていくほど活動の幅を広げていく様子が具体的に論じられた。「5. 文筆活動／帝国の拡張における役割——尾崎孝子」では、1920年から1927年まで台湾で過ごした尾崎孝子の台湾での経験について、特に彼女の文芸活動に焦点があてられ、台湾滞在中に出版された歌集『ねむの花』などの作品の特徴が紹介された。

その上で「6. 社会階層の「越境」」では、高橋鏡子、尾崎孝子ともに、台湾においては、日本「内地」での所属階層より上昇して「新中間層」の生活を経験したことが指摘される。そしてその「新中間層」とは、植民地での権力構造を背景に日本「内地」の「中間層」とは異なる性質をもつものであり、台湾人社会とは一定の距離をおくものであったという刺激的な議論が展開された。さらに「7. ジェンダーの境界と「越境」」では、台湾での生活の中で、高橋鏡子、尾崎孝子ともに「家庭内から家庭外」へと活動の場を広げていく姿が論じられた。具体的には、高橋の場合、当初は夫とともに台湾に渡ったが、台湾で自分自身の人的ネットワークを築き上げ、それによって新たな移動と職の機会を得たという。また尾崎の場合、もともと身一つで自主的に渡台した彼女は、台湾では念願の短歌の創作に打ち込み、職業人としての生活を送ったという。その意味で、植民地台湾とは、彼女たちにとっては「自己実現の場」であったとされる。

最後に「8. 彼女たちにとっての台湾とは？」では、日本に帰った後の彼女たちにとって、「台湾」とはどのようなものだったのかが改めて問われる。そして高橋鏡子にとっては、8年間の台湾生活は彼女の黄金時代だったと結論づけられる。さらに尾

戦前「中間層」日本人女性の台湾への移動——「越境」と植民地経験を考える（顔 杏如）

崎孝子にとっては、もともと「異郷」であった台湾は、日本への帰郷後、「ふるさと」として認識されることとなったという興味深い指摘が行われ、報告を終えられた。

（文責：松田 京子）